

# 養老川流域の歴史散歩

## — 中世期の養老の地 —

総の国をかたる会  
白鳥 元治

### 1. はじめに —養老という地名について—



中高根集落前方の広がる水田に、東に突き出している低地の一角が在る。その地にある神社が、鶴峯神社である。鳥居の脇の案内板に、神社の由来が記してあるがそこには、「当社は後宇多帝建治3年(1277)本宮九州宇佐八幡の御分霊を戴き、～大江朝臣妙彌が与宇呂宇新八幡宮として勧請、号を米山代鶴峯八幡宮と称して鎮齋されたのが始まりと伝えられています。～」とある。大江朝臣妙彌とは誰なのであろうか、下級貴族の出で源頼朝に仕え鎌倉幕府創建以前から重用され、幕府の政策に関わっていた人物の大江広元の後裔の一族ではないかと思ったりしているがどうだろうか・・・。「与宇呂宇」とあるが、「与宇呂保」のことであろう。「保」とは海保の「保」と同じで、平安時代後期以降に成立した行政区画である。これまでの郷や

荘と並ぶものと同じであるが、古代の土地制度の体制が崩れ中世の国衙領の開発とともに、新しく生まれた行政単位である。周知のことであるが国衙とは、朝廷の派遣した国司が司る役所の総称のことで、統治下にあった地を国衙領という。中世という時代は、各地方で地元の有力領主たちが、開発した耕田を私有化しながら農民たちが武装化し、武士といわれ自立していった時代の幕開けでもあった。幕府の職名である守護・地頭の「地頭」には、もともと「現地」という意味がある。

後年、武士政権が関東に成立した鎌倉期のことになるが、文永11年(1274)と弘安2年(1279)に中国の元の軍隊が、日本に來襲した元寇といわれる事件がある。執権北条時宗の頃であるが、内外に難題を抱えながらも幕府は異国警固体制をとり、異国調伏祈禱を各地で行わせていた。国難といわれた時代背景ながら、北条の得宗権力が強化されていった時代でもある。この中高根の新鶴峯八幡宮の勧請は、この頃の幕府政策のひとつであったかもしれないとふと思ったりしている。

「与宇呂」のことである。中世を知る史料として、よく知られている金沢文庫文書から採りあげてみる。現中高根の常住寺が、北条氏の菩提寺覚園寺の末寺であり上総国の祈禱寺であったことから「上総国与宇呂保浄住寺祈禱所寄進状案」(観応3年・1352年)というものが

残っている。また「称名寺々領年貢米注文」「称名寺用配分置文」(文書年未詳)という文書にも、それぞれ「与宇呂保」という記載がある。その他にも、海保遍照院の棟札に「上総国与宇呂市原郡海保村・・慶長7年季壬卯月18日」とあり、醍醐寺所三宝院文書の「市原八幡宮国役庄役事」というものにも、「与宇呂」の文字が見られるという。すると昔の文書から、「与宇呂保」は中高根や海保を含むかなり広い地域の呼称になっていたことが分かる。

古語に「ヨホロ」という言葉がある。和名抄に「臙(ひかがみ)、和与保呂、曲脚中也」とあるが、ヒカガミとは「膝の窪んでいるところ」(広辞苑)をいう。「和名抄」とは、平安時代の最古の漢和辞典といってもよく、文字の出所考証・注釈をしているもので、今昔物語にもこの文字が出てくる。「日本国語大辞典」には、「古く、朝廷のために挑発されて使役された人民・丁があてられる」ということに加え、「膝の裏の窪みをヨホロと呼ぶことから、川や山の屈曲点などを呼んだものか・・・」とある。養老川が、有数な蛇行の多い氾濫河川であったことを思うと、養老川流域の呼称が「与宇呂保」となったのであろうという説が有力である。

養老川という川の呼び名と表記は、江戸時代末期頃から見られるという。それまで川の上流・下流それぞれの地で呼び名があったようである。大川と呼んだり、単に川といていた。昔はそれだけで日常生活には支障はなく通用していたのだろう。また五井川・飯沼川・用呂川・烏宿川・加茂川・勇露川・手綱川・・・といったように、川の上流・下流それぞれの地域での呼称があったようである(市原市史別巻・市原郡誌)。古語「ヨホロ」は、長い年月とともに「ヨウロ」、「ヨウロウ」となっていき、その意味や区別も分からなくなり曖昧なものとなっていき、いつのまにか養老という漢字を当て字にしたと考えられている。また明治の町村合併制度で、養老村というこの地域の村名も誕生したといえそうだ。

## 2 松崎の館跡



養老小学校の東側に隣接して松崎公園があるが、その脇の小台地一角に春日神社がある。西方の開けた水田と分けて、小台地の縁に沿って細道が磯ヶ谷の低台地へと向かう道があり、登りきると交通信号機のある県道13号線・市原茂原線に出る。すぐ近くに磯ヶ谷郵便局があり、三和中学校から磯ヶ谷の八幡神社前のカーブを曲がって、500m位所である。郵便局の前は緩やかに上りになっていて、円成寺の前を通る。この県道は上り下りを繰り返す道路で、川在・大桶、そして刑部へと通じるが、千葉セントラルゴルフ場あたりから下っていくと、ウグイスラインとの交差点の大桶になる。

円成寺は市原郡誌によると、「日蓮宗松王山と号し、甲州身延山末寺にして～慶長8年(1608)に創建された」とあり、江戸時代初期とわりと新しい寺である。鎌倉期の東条景信の出自は、安房国長狭郡東条郷の地頭であるが、日蓮は他宗を誹謗・批判したためということで、念仏信者であった景信に待ち伏されて負傷を負う。「小松原の法難」といわれる。その際討ち死にした鏡忍坊と天津城主工藤吉隆の菩提を弔うために創建した寺が鴨川市の鏡忍寺である。日蓮の弟子が17年後の弘安4年(1281)に創建したものである。日蓮は、長狭郡東条郷の生まれともいう。日蓮は、長南に逃れて匿われ、笠森から茂原へと向かい、領主である斎藤兼綱のもとで布教活動をしながら鎌倉へと入る。兼綱が仏堂をつくり当初、常楽山妙光寺と称したのが、現在の茂原市の藻原寺である。二世日向は身延山を兼務したので、ここを俗に東身延とも呼ばれた。こういった背景のある鎌倉期の一時期、養老の地は幕府の代官となった東条氏の支配下であったと思われるのだ。弘長元年(1261)に鎌倉幕府は日蓮を伊豆へ流しその後、斬首を赦免とし文永8年(1271)に佐渡へ流罪にしている。

円成寺の境内の縁に立つと、広く水田を眼下に入れて見渡せ、養老小学校方面からの道と、春日神社のある台地の森を遠望することができる。県道市原茂原線に出る手前に、台地下からの脇道があり、入口に、自治会館脇に庚申塔がある。庚申塔は、磯ヶ谷集落入り口との境界を示していたのだろう。県道に出ず台地下のこの脇を上ると、台地下の縁は急な崖になっていて10m位はあるようだ。この登り道は堀切のようでもあるし、奥は折れを伴った土塁ともいえそうな所もある。城館跡とする説もあるが、断定はできないようだ。しかしここには、「堀合・的場・城下」といった字名があることから、中世初期の城館跡であるとする見方もある。これといった縄張りもないことから、小土豪の居住地域であったかもしれない。同じ磯ヶ谷の、八幡神社付近にも城館跡いえる「宿・後馬場・塙」といった字名も残している。それぞれ、その小地域の土豪たちの館があったのだろう。

円成寺の境内には、東条家と刻む墓石が多く、松崎の地元にはこの姓が少なからず存在する。ちなみに市原郡誌に、旧養老村の初代村長は、東条喜惣治氏で(自明治22年5月13日至同25年4月日不祥)とある。明治22年4月1日市町村制度実施の合併により、養老村が誕生する。

### 3 金沢文庫文書から (市原市史 資料集中世編)

——上総国土宇郷内田島等寄進状請取状案——

——上総国與宇呂保浄住寺禱禱料所寄進状案——

#### (1) 金沢文庫と称名寺

鎌倉時代後期には、足利氏が上総国守護職を世襲していたが、北条氏一門である金沢氏が上総国の国司を歴任した。そのため、金沢北条氏による政治力の影響が、養老の地(与宇呂保)には大きかった。北条実時が、所領の武蔵国六浦荘金沢を根拠地としたことで、金沢北条氏を称した。三浦半島に、横浜市金沢区に六浦という地名が現在も在る。実時は、執権北条義時の孫になる。幕府の重職を務め執権時頼の補佐役になった人物であり、亡母の菩提寺を別荘内に称名寺を建立した。また学問を好み、京の公家学者を招いたりし、代々金沢一族

は学問を学んだといわれ、多様な教学を学僧がここで学んだことから、「金沢学校」といわれた。こういったことから、称名寺の寺領とこの北条金沢氏の所領が、上総をはじめ房総各地に存在した。そのため金沢文庫として、この頃の時代を知る貴重な文書も残された。現在の中高根の常住寺は、鎌倉時代末期頃に北条氏の菩提寺覚恩寺の末寺として建立されたものである。

## (2) 土宇郷内田畠寄進状請取状案から

「内田畠」は、堀内の内が脱落しているのだろう。現三和地域といわれている一帯は、金沢北条氏の所領であった。北条氏の所領は、鎌倉に置かれた家政機関の公文所によって中央集権的に管理され、特に所領荘園事務を司った政所から、被官(家人)が派遣された。市原郡誌によると、舊本記に松崎郷の神社のことが記されていて、「其の頃東条氏の南総を領するに至て代々喝仰浅からず・・・」とあるという。文書の日付は、「嘉暦3年12月13日(1328)」とあり鎌倉時代末期のことである。東条氏が、この文書の時期に幕府から代官として、派遣されていたのかどうかは分からない。土宇郷堀之内とは、東林寺のある峰近くに字名が残る集落であろう。文書の大要は、冒頭に「上総国土宇郷堀内田畠山□(野)□(等)所寄進當寺也、・・・」とあるが、當寺とは、称名寺のことであり土宇郷の田畠の寄進を受けていたことが分かる。称名寺が幕府に伺を立てているのであろう。寄進したのは、北条氏に被官化していたこの時の代官か、土宇の地頭領主なのかこの文書だけではよく分からない。「案」とは、「そのような考えである、計画でいる」ということなのであろう。また鎌倉末期、称名寺の運営費用として、所領である「与宇呂保」の年貢高を書き上げた一連の金沢文庫文書も残っている。

## (3) 与宇呂保浄住寺祈祷料所寄進状案から

北条氏菩提寺覚恩寺の末寺として建立された浄住寺は、上総国の祈祷寺であった。現在の中高根にある常住寺のことである。祈祷寺は幕府によって保護され、本山覚恩寺の支配下の寺であり、一族の繁栄や戦の無事などを祈願する寺である。この文書は、観応3年(1352)8月3日の日付がある。鎌倉幕府崩壊後、足利氏の祈祷所となっていたとみられ、内容は浄住寺がこれまで実施してきた祈祷の恩賞として、所領の寄進を願い出た文書である。時代背景から、観応の擾乱(弟の足利直義との対立と戦い)の時、足利尊氏の命に従って祈祷をおこなったとみられている。また覚恩寺仏殿の虹梁に、足利尊氏の自署があるという。

## 4 上総の国とつなぐ鎌倉街道 高坂から枝道へと

現在の常住寺の下の地は、「寺の下」という地名で急坂な道となっているが地元では、「鎌倉街道」と呼ぶ人もいる。坂の上が風台団地の街であり、さらに一段と高い所までに上ると旧高坂集落の旧道と繋がり、光風台小学校の裏とゴルフ場の間を通る道とも繋がる。光風台団地は、坂の多い地である。ゴルフ場内になるが、道の一角に祠が残る。古老の話の聞くと、鎌倉街道と呼ばれた道は、ゴルフ場内の「一本松」と称した辺りで、分目・高坂・海保・立野方面・高根方面と枝分かれしていたと推測される。通称鎌倉街道は、しばらく立野から市原市と袖ヶ浦市の境界を辿り、袖ヶ浦台地から台地先端の袖ヶ浦公園・飯富神社に至

り木更津から、海路三浦半島の横浜市金沢区六浦に向かっていた。木更津市の貝淵町に字名「渡海面」があり、その間にも字名「鎌倉街道」が幾つかある。ここの地域の上総国の位置を考えると、浄住寺は上総国の入口としての役割を果たしていたといえそうだ。立野にも鎌倉街道という字名がある。鎌倉街道とは、鎌倉幕府御家人の居住地の居館から「いざ鎌倉」の時に馳せ参じる軍用道路であり、関東から中部地方にかけて呼ばれていた鎌倉へと繋ぐ中世の古道である。袖ヶ浦台地の野田にも字鎌倉街道があり、館山自動車道の工事に伴って発掘調査された「山谷遺跡」の所である。側溝の道路に沿って建物の跡や墓などが発見されたが、街道筋に発達した村だといわれる。軍用道として鎌倉期に整備はされたであろうが、それ以前の古代から地域の重要な道路であったようでその痕跡も発掘されている。戦前に活躍した郷土史家の「小熊吉蔵」氏が、木更津市中烏田曲がり坂にある石仏の「かまくらみち」という道標がきっかけで、古道の研究を始めてこれらの古道を突き止めたという。調べているうちに、鎌倉街道に関連した地名があることも分かってきた。袖ヶ浦市野田字鎌倉街道・袖ヶ浦市蔵波字鎌倉街道・市原市立野字鎌倉街道があり、鎌倉街道に接続した市原市中高根には、字大街道・旧戸田村の地籍内にも字大街道と呼ばれる地がある。この古道は旧高坂付近、現在はゴルフ場になっているが、以前は畑で一本松があった。この辺りで古道は枝分かれしていたのだ。台地下を削ってできた団地が現在の光風台団地である。

「高坂」という地名の由来は、「急な傾斜地で坂がある地」からきているようだ。古地図を見ても分かるようにこの地から、分目・神代・引田方面、立野・今富～海保・姉崎方面、また安須・山田・二日市場方面そして中高根・上高根方面と枝分かれする。古道は、高坂の台地から坂を下るのだ。かつて筆者は、分目住人の古老から聞いたことがある。「戦後まもなくまで、地の者は、一本松を目安にしてこの古道を自転車で木更津方面に抜けたものだ」という話である。鎌倉街道は、深城・天羽田・立野といった市原市と、上泉・のぞみ野といった袖ヶ浦市との境界上を通り大曾根・飯富の袖ヶ浦公園へと向かう。律令時代でいえば馬来田国の望陀郡と市原郡との境でもあり、古道に沿って火葬墓遺跡が発掘されている。その先は小折・上総国分寺・上総国府方面へと抜ける官道になっていたと想われ、この道の古さが分かる。この鎌倉街道は、武士のみならず年貢の輸送や商人、諸国を巡り歩いていた芸人、修験者といった人と物が行きかい、各地から鎌倉の地を通した文化の息吹も伝わってきたであろう。平安時代末期にはいと、開発領主を中心に自立した小集落の領主が、信仰と村の纏まりのシンボルとして仏像を安置し寺院を建立し、その痕跡を現在に伝えている。海保の森巖寺の木造千手観音菩薩坐像(南北朝時代、鎌倉期の仏像の様式)・引田の蓮蔵院と木造観世音菩薩立像(11世紀頃)・宮原の円満寺木造不動明王(南北朝時代)・中高根の常住寺五輪塔・宝篋印塔と板碑(観応という年号から、鎌倉幕府が滅び後約20年後)・風戸の日光寺の木造聖観音立像(11世紀前半頃)・上高根の称禮寺木造薬師如来坐像及び両脇侍立像三軀(平安時代後期といわれる)・武士の法泉寺の木造小観音菩薩及び二天立像(建長8年、鎌倉時代中頃・二天像は平安後期か)・栢橋の医養寺の薬師如来立像・西国吉医光寺阿弥陀如来坐像(平安時代末期)がある。古道・鎌倉街道が、地方の領主と鎌倉あるいは遠く都と繋いで、仏師と文化を運んできたにちがいない。悟りの法を説く如来に対し観音信仰は、衆生に現生利益の救済を施す存在であるし、如来は悟りを開いて仏になったものに対し、菩薩は悟りの境地に達し



ように努力している姿をいうことから、飛鳥・奈良・平安期の仏像の貴族たちの一部の信仰から、中世になって地方のより多くの人々への信仰の対象になっていった姿も垣間見ることでもできよう。

### ●高坂という地名について

高坂という地名は、全国各地に存在する。その呼称に「タカサカ」とか「コウサカ」とかがあるが、市原の高坂は、「コウザカ」と濁音である。関西の大阪は、坂の多い地域で昔は単に坂と言っていたようだが、どうも高坂の由来は、地形からきているようである。その地名は、山形・福島・富山・石川・兵庫・・等の各県にあり、君津市にも「コウサカ」という地がある。例えば、埼玉県東松山市の高坂「タカサカ」の発祥由来の記述に、「～南北朝時代の豪族にコウザカ刑部太輔が高坂館を築いたことが地名の由来というが、南と北の川に挟まれた台地上にあるため坂が高く、高坂の地名が付いたとされる。～」という説があるとし、その地の地形からきているのが本来の地名であろう。ゴルフ場やお団地ができる以前の高坂は、山深い丘陵台地でありこの丘陵地の「根」に点々と集落を形成してきたのだ。中高根・上高根だけでなく、昔は下高根という地名もあった。

#### 鎌倉街道と古道



時代の流れの本質からいえば、源頼朝と平清盛時代の本質は同じである。その後は鎌倉幕府による政治でありながら、まだ王朝政治とのかかわりのなかでの幕府政治であった。

北条時代というべきか、

2代将軍源頼家を殺害したのは北条氏で、政権を取り戻そうとした後鳥羽上皇との承久の変、源氏は滅亡した。その後 御成敗式目を制定した北条政権は約 110 年続いた強力な軍事政権であった。王朝西国中心の政治の拠点が、東国になった。